

Maker にとっての「俺たちの大臣」シンガポールのヴィヴィアン大臣

高須正和のアジアンハッカー列伝

■俺たちの Ministar

シンガポールの IT 施策については前回（リンク）で触れました。

シンガポールの政治家はおおむねテクノロジーに関心があるようですが、Vivian Balakrishnan 大臣（ヴィヴィアン・バルキシシュナン、以下ヴィヴィアンと表記）は極めつけです。

僕はシンガポール Mini MakerFaire の実行委員をしていて、ほかにもいくつかシンガポールの Maker イベントに関わっているのですが、とても高い確率で、休日にヴィヴィアン大臣が、息子さんを連れていらっしゃいます。

最初にお会いしたのは Makeblock という DIY のイベントだったのですが、トランスフォーマーのオプティマスのコスプレと一緒に写真を撮っている人が大臣と聞き、ずいぶん気さくな人だなあと思っていました。



optimas_vivian.jpg

makeblock.jpg



気さくな人だという印象はその後も変わらないのですが、かなり熱心に各ブースを見て回り、特にハッカースペースシンガポールのブースで売っていた、電子回路にはんだ付けなしでセンサー類を取り付けられる [Grove Kit](#) に興味を示して、ハッカースペースの人と「これに Arduino は入ってる?」「RaspberryPi で使うことはできるの?」等、かなり細かい話をした後、ポケットマネーで買っていかれました。

その後、[この記事](#)を『コバルト爆弾 $\alpha\Omega$ 』の大宮俊孝さんに教えてもらったことで興味が沸き、いろいろ調べてみて、そのギークぶりにすっかりファンになりました。

それから3週間後、シンガポールの『Mini Maker Faire』が開かれたのですが、そちらでも開場してから真っ先に来て、ブースを歩き回るヴィヴィアン大臣の姿が見られました。



Intel.jpg

オープン直後、まだ人のいない午前中にインテルブースを訪問。そういえば前回のイベントとほぼ同じ服装なのですが、トレードマークなのかな？

注意してみると、長い時間足を止めてるブースはどれもかなり面白いのです。今は環境大臣をやっているのです、リサイクルとか DIY 太陽光発電のブースで話をしてる時間が長いのですが、他でも面白そうなブースでは例外なく足を止めていました。



太陽光.jpg

DIY 太陽光発電のブースに足を止めるヴィヴィアン大臣。左の少年は息子さん。

ブースでの会話も、コンセプトだけではなく技術のかなり細かいところを聞いていたり、作品公開からの反応を聞いていたり、政治家にありがちな「仕事としての訪問」とは

まったく違うものです。それは僕らと変わらない『MakerFaire』のお客さんでした。



LED_startup.jpg

シンガポールのスタートアップが作っている 12V LED の Controller について話すヴィヴィアン大臣



[tks-vivian.jpg]

僕が書いた「[ギークが大臣をやってる国 シンガポール](#)」のレポートを見て、「日本人が書いてくれたのははじめてかも。もっとたくさんの日本人ギークがシンガポールに来るといいね。」と喜ぶヴィヴィアン大臣



Takasu.jpg

「ハッカースペースシンガポールでは珍しい、日本人のメンバーなんだよね。ありがとう」と、記念写真にも応じてくれました。僕が来てる赤いポロシャツはシンガポール MakerFaire の実行委員/出展者がもらえるもので、ヴィヴィアン大臣は MakerFaire のホストでもあります。

シンガポールの **Maker** はたいてい彼と話したことがあります。シンガポールの **Maker** にとって、彼は「俺たちの大臣」なのです。

■Apple II plus からのコンピュータ使い

ヴィヴィアン大臣は今 53 歳。10 年前、43 歳の時からさまざまなポストを経験している、とても若い大臣です。

1961 年、タミル系インド人（シンガポールの人口の 1 割ぐらひはタミル人で、タミル語は公用語の 1 つになっています）の父と中国人の母の間に生まれました。

高校生の時、医者だった父が Apple II plus を 60 万円ほどで購入したことからコンピュータ歴がスタートします。日本だと、野尻先生（尻 P）とか歴本先生とかとおおむね同じ世代のギークだとも思います。

「コンピュータについては、1980 年代に、ゲームをハックするところから学びはじめた。”オデッセイ”という、”ローグ”みたいなキャラクターベースの RPG ゲームを、ジョイスティックで動かせるようにした。当時はインターネットがなかったから、図書館でコンピュータを勉強しはじめたね」

ヴィヴィアン大臣はその後、奨学金を得てシンガポール国立大の医療科に進学。さらに 1990 年代からイギリスに留学して医療について学び、ロンドンで眼科医として働き始めます。このときもコンピュータ熱はもちろん続いていて、当時の人気アプリ Wordstar をハックして、電子カルテシステムを自作していたと言います。

「さすがに仕事をしながらだと、出荷できるようなクオリティのものを作るのは難しいけど、電子カルテシステムは数少ない、ちゃんと使えたモノの 1 つだ」

その後シンガポールに帰国しても眼科医としてのキャリアを重ね、2000 年頃から陸軍病院に勤務、その後政治にも携わるようになりました。

ヴィヴィアン大臣は今も仕事が終わると電子回路やプログラムをいじって、何か工作をしています。3 人の子供がいて、一番小さい子供は 7 歳なのですが、彼のために LittleBits で一緒に遊んだり、レゴ・マインドストームのためのプログラムを書いたりしています。

家族が家のドアを Web 経由で開けられるように、Web と連動したマイコンとリレー回路を使って、「携帯からパスコードを入れると家のドアが開くシステム」を作ったりもしている、ソフト、ハード、ネットワークまで一通り今も触っている現役のギークです。

■クリエイティブすること

ヴィヴィアン大臣はコンピュータやプログラムそのもののだけでなく、それが何に使われるかについても深い関心を払っています。

「子供に正しいツールをあたえると、僕たちの予想を超えて彼らのアイデアは広がっていく」

「価格破壊はもう起こっていて、”お金が原因で何かできない”ということはもうなくなっていく。父がローンを組んでくれた Apple II は \$6000 したけど、RaspberryPi は \$38 で、小学生以下の子供でさえ、プログラムを学ぶための情報が無料で手に入る。」

MakerFaire のホストを引き受けたのも、「メイドインシンガポール」のテクノロジーを生み出したいからだと言います。

次世代のシンガポール人に求める ABC として、ヴィヴィアン大臣はこの 3 つを挙げています。いかにも Maker らしい言葉です。

A=Art

感覚に訴えかける、グッと来るモノは何かについてきちんと考えるべきだ

B=Building

オリジナルのものを自分で「つくる」というマインドをもたなければならない。

C=Communication

感覚に訴えかけるいいモノを作ったとき、その「良さ」をきちんと伝えないとならない。「速い」「安い」だけではだめだ。シンガポールを商人だけの国にしてはいけない。

また、ヴィヴィアン大臣は自分のブログで、スティーブ・ウォズニアックと Apple II の Basic やシンガポールの教育、クリエイティブについて語り合ったことを書いています。ウォズと普通に話せるハッカーが閣僚をやっているというのはすごいことだと思います。

アメリカでも[オバマ大統領がホワイトハウスで MakerFaire](#)を行ったり、Google のエリック・シュミット CEO との対談で、「100 万の 32 ビット整数を効果的にソートするにはどうすればよいと思われますか？」と冗談をふられて、「バブルソートを使うのは間違いだと思う」と即答して会場の喝采を浴びる([動画](#))など、テクノロジーに関心の深いところを見せています。(もっとも、アメリカ人の Maker に「アメリカの政治家はすごいね!」と言ったら、「あれはオバマが特別で、ブッシュ親子はぜんぜんテクノロジー詳しくないと思うよ」と返されましたが)

MakerFaire でのヴィヴィアン大臣との立ち話で、「ホワイトハウスの MakerFaire はすごいですね、僕らもやりたいですね」と話したとき、「いいねえ、日本のほうが早いんじゃないかなー」とお答えになられたのですが、僕はたぶんシンガポールのほうが早そうな気がしています。日本の Maker が大臣と気軽にこんな話ができるのは、まだ先だと思うので。

日本でも与謝野馨氏（もと通産大臣）は[自作 PC のマニア](#)だったようですが、最近の政治家でテクノロジー好きそうな人を見当たらないのがさびしいところです。

ハッカーにとって「俺たちの大臣」のいる国シンガポールには、多くのハッカーがいます。いろいろなアジアのハッカーをこれからも紹介していきますので楽しみに。